

井藤希 令和4年3月度特別作品

冬の瀬野川

井藤希

数年前から住んでいる地域を瀬野川が流れている。海から数キロメートルの河川敷には、遊歩道が整備されていて、よく散歩に出かける。川の傍に住んだことが無かった私には、河原を歩きながら眺める景色は、珍しく又楽しいものである。

この川には鳥が多くいる。留鳥も渡り鳥もいるが、鳥たちを見ていると飽きない。鳥同士が争う姿は目にしなないけれど、自然界なので、皆必死で生きているのだろう。この鳥たちも含めて、冬の瀬野川のゆつたりとした風景は、私を穏やかな気持ちにさせてくれる。

源は遠き山なり川涸るる

涸川を電車の渡る音のする

照り翳り川に沿うたる枯木道

川岸に迫りて山の眠りけり

川岸にひとときは高く公孫樹枯る

冬の川流るる方へ帰りけり

水門に水流れざる冬の川

海へ向き橋くぐりたる鴨の群

川沿ひの桜の冬芽確かむる

海近き橋に夕日や冬終る

《作品鑑賞》

ちどり

冬の瀬野川を、私も作者と一緒に散歩しているかのようだった。一句一句読み進めるにつれて、川やその周辺が変わっていく。柔しく、穏やかな気持ちになっていった。

源は遠き山なり川涸るる

作者は、涸川からその源の遠き冬山に思いを馳せる。そのことにより、この作品はさらに広がりが出たと思う。

冬の川流るる方へ帰りけり

作者は、冬の川の流れに合わせて、ゆっくりと家に帰っているのだろう。心穏やかなひと時。

海近き橋に夕日や冬終る

海の近くの橋に、束の間の赤い夕日の光景がとても印象的だ。やっと冬が終わるという安心感を感じる。

橋渡り桜の土手でお弁当

新庄憲彦



私の行った幼稚園は錦帯橋を渡って三キロほどの町中にあるお寺さんでした。当時は車もほとんど通らず、子供だけで連れ立って長い時間かけて通いました。雪の日はよく橋の階段で滑って泣いたのを覚えています。途中の土手の忠魂碑の台座で皆で食べたお弁当のおいしかったこと。平成の地震で台座が傾きしばらく綱が張られていましたが、また元通りに修復され昔ながらの形を取り戻しました。七十年以上前の話です。